

# 「わすれなぐさ」の詩人アーレント

—『現人詩人氣質』の編者—

瀬戸 武彦

(人文学部・独文研究室)

## Wilhelm Arent als Herausgeber der „Modernen Dichtercharaktere“

Takehiko SETO

(Seminar für deutsche Philologie der philosophischen Fakultät)

### I. 「海潮音」の中のドイツ詩人

柳村上田敏の訳詩集『海潮音』（明治38年、1905）には、ドイツの詩人七人の詩七篇が訳出されている。すなわち、ヴィルヘルム・アーレント（Wilhelm Arent）の「わすれなぐさ」、カール・ブッセ（Carl Busse）の「山のあなた」、パウル・バルシュ（Paul Barsch）の「春」、オイゲン・クロアサン（Eugen Croissant）の「秋」、ヘリベルテ・フォン・ポシンガー（Heriberte von Poschinger）の「わかれ」、テオドール・シュトルム（Theodor Storm）の「水無月」、そしてハインリヒ・ハイネ（Heinrich Heine）の「花をとめ」である。上記の中で最後の二者、つまりシュトルムとハイネは、ドイツ文学史上でも大きな位置を占め、日本においても今日なお多くの読者を引きつけている詩人であることは言をまたない。なかんづくハイネにあっては、明治22年（1889）『国民之友』の付録『於母影』に鷗外の訳で「あまをとめ」（, Du schönes Fischermädchen'）が収められたのを初めとして、明治24年（1891）には早くも「ローレライ」（Lorelei）が訳出されている。さらに真偽のほどは審かではないが、ハイネ自身『告白』<sup>1)</sup>（, Geständnisse“, 1854）において、自分の詩がすでに日本語に翻訳され、それが日本におけるヨーロッパの書物の嚆矢となっている事を、多分にゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe）を意識して、誇らしげに書き留めているように<sup>2)</sup>。ハイネと日本の係わりは「海潮音」をはるか遡ることができる。一方シュトルムを含む六詩人は、『萬年草』等の雑誌に上田敏が初めてその邦訳を載せ、のちに『海潮音』に収められて改めて紹介されたものであるが、シュトルムを除く五人の詩人は、いまやドイツ文学史上から殆んど姿を消した忘れ去られた詩人達であることは、現今のドイツの定評ある文学史書<sup>3)</sup>にもその名を見ることがないことによって知ることができる。しかし『海潮音』に収められた数多くの訳詞の中でも名訳と謳われたのが、ヴェルレーヌ（Paul Verlaine）の「落葉」、オーバネル（Theodore Aubanel）の「故国」及びドイツ抒情小曲の、アーレントの「わすれなぐさ」、ブッセの「山のあなた」である。

「山のあなた」（, Über den Bergen'）の詩は、日本では誰知らぬ人はいないといっても過言ではないほど人口に膾炙している。この「山のあなた」から着想をえて、若山牧水の広く愛唱されている短歌——幾山河越えさりゆかば寂しさの、はてなむ国ぞ今日も旅ゆく——が言はば生みだされたことについては、安田保雄氏がその著『上田敏研究——その生涯と業績——』<sup>4)</sup>において論じている。試みに上田敏訳の「山のあなた」を記してみる。

山のあなたのそら遠く

「幸」住むと人のいふ。  
 噫、われひとと尋めゆきて  
 涙さしぐみかへりきぬ  
 山のあなたのなほ遠く  
 「幸」住むと人のいふ。

カール・ブッセの「山のあなた」と牧水の「幾山河……」の短歌との間に、相通じる詩情を見ることはごく素直な感想と受けとれるように思う。まして、上田敏がこの「山のあなた」を、「やまとことば」による日本語に移し換えることにつとめ、古今集巻18の読み人知らずの和歌——みよし野の山のあなたに宿もがな、世の憂き時のかくれがにせむ——を念頭においていたこと<sup>5)</sup>を考え合わせると、「山のあなた」の訳詩がもっている和歌、短歌的性質が、牧水の「幾山河……」によって短歌そのものに簡潔に纏めあげられたと言い得るかもしれない。

このように、日本人に愛唱される理由を見てとることのできた「山のあなた」の原詩の詩人たるカール・ブッセその人に関しては、しかしながら知られていることは少ない。当時のドイツの文壇において、多少影響力のあった詩人で、ヘッセ (Hermann Hesse) を世に出すのに与り、ヘッセが後年、感謝の念を抱いていたらしいことについて、近年紹介されている程度であろう<sup>6)</sup>。

ところで、カール・ブッセの「山のあなた」の訳詩などともに上田敏の名訳とされたアーレントの「わすれなぐさ」となると、いまやその訳詩は、況んや原詩の詩人アーレントに至っては、日本においてすら全く忘却の淵に埋もれてしまったといえるのではなからうか。しかしそのアーレントは、『現代詩人氣質』(„Moderne Dichtercharaktere“)によって、さながら一陣の風のようにドイツ文壇に新風をそそぎこみ、そして過ぎ去って行ったのである。

## II. 「わすれなぐさ」と『海潮音』の原典

既に言及したように、『海潮音』中のいくつかの名訳の一つ、否、名訳中の名訳とされているのがヴィルヘルム・アーレントの「わすれなぐさ」(„Vergissmeinnicht“)である。以下にその訳詩ならびに原詩を記す。

ながれのきしのひともとは  
 みそらのいろのみづあさき  
 なみ、ことごとく、くちづけし  
 はた、ことごとく、わすれゆく

Ein Blümchen steht am Strom  
 Blau wie des Himmels Dom;  
 Und jede Welle küsst es,  
 Und jede auch vergisst es.

みごとなまでに可憐有情たる一篇の抒情小品が生みだされている。島田謹二氏は、「殆ど逐語の直訳で、しかもびったり原詩のいはんとするところを写し出している。名匠の神技、まことに驚くべきである。」<sup>7)</sup>と最大限の賛辞を表わしている。ところで、日本的抒情性によそおわれて訳出されたこの詩の日本語は、「山のあなた」において示された「歌ごころ」以上に和歌の言葉、つまり、「やまとことば」によるものである。『海潮音』中ただ一つ「仮名書き」によるこの訳は、今

様体をとったものとされている<sup>8)</sup>。古今集巻17の読み人知らずの歌、——むらさきのひととゆえにむさしのは、花はみながらあわれとぞ見る——この有名な和歌を想起することも容易である。このことが訳詩を、日本的詩情に富んだ抒情小曲として、原詩から切り離された一個の創作詩としても見なしうるまでに独立したものにしたと言える。ただ、すべてをひらがな書きにするという思いつきは、上田敏の全く独自の思いつきではないようである。この事については島田謹二氏が、氏の一連の『海潮音』の原典研究のひとつである「海潮音の『わすれなぐさ』その他」において考察されている。その中で島田氏は、「わすれなぐさ」には、鷗外が編んだ訳詩集『於母影』の中の「花薔薇」の影響が見られると推察している<sup>9)</sup>。「花薔薇」の訳詩は以下の如くである。

わがうへにしもあらなくに  
などかくおつるなみだども  
ふみくだかれしはなさうび  
よはなれのみのうきよかな

「花薔薇」の原詩はドイツの詩人カール・ゲーロク (Karl Gerok) の „Die Rose im Staub“ で、直接の訳者は井上通泰であるが、鷗外がなんらかの形で関与している可能性は大きく<sup>10)</sup>、また上田敏が鷗外と親しくしていたことを考え合わせると、二つの訳詩から一見して思い浮かぶ「仮名書き」も単なる偶然にとどまるものではないかもしれない。

この関連からも、上田敏がアーレントの「わすれなぐさ」をいかなる本から訳したかが問題となる。島田謹二氏は前記論文の中で、ハイネの詩を除いては、「わすれなぐさ」等ドイツ抑情小曲の原典は、それまで秋元蘆風が『現代独逸詩人』(大正四年, 1916)の中で、ヤコボフスキー (Ludwig Jacobowski) 編の『現代ドイツ国民詩集』 („Moderne deutsche Lieder für's Volk“) であるとしていたのを、同じヤコボフスキー編の『近代ドイツ国民精選新詩集』 („Neue Lieder der besten neueren Dichter für's Volk“) であろうとの推定を下した。上田敏自身がこの本を持っていたか、親交のあった鷗外から——鷗外蔵書に今日も入っている——借用したとの推定である。島田謹二氏とは別に『海潮音』の原典研究を行ない、筆者をして初めてヤコボフスキーの名を知る機会をその著『上田敏研究——その生涯と業績——』で与えてくれた安田保雄氏も島田謹二氏の説を支持しているが、ヤコボフスキーの前記二詞華集の関係の不明点、例えば両者の間に、前者が後者の改訂版という関係があるのか否かについても触れている。筆者もこの点の究明を試みたが、残念ながらいままでのところ、まだ解明するまでには至っていない。ただ、„Neue Deutsche Biographie“ を当たってみると<sup>11)</sup>、ヤコボフスキー (1868~1900) はその短い生涯に、二十一に及ぶ文学上の著作をものして、編集したものは六冊、その中の四冊は、ドイツ国民のための („für's deutsche Volk“<sup>12)</sup>) と銘打たれた詞華集とされている。そのような言葉が添えられていることの特別な意味<sup>13)</sup>については、筆者は別の機会に論を新たにしたいと思っているが、四冊の中の三つについてはその名が判明している。一つは先にあげた『近代ドイツ国民精選新詩集』で、他の二つは、『国民詩集』 („Lieder für's Volk“) 及び『精選国民詩集』 („Deutsche Dichter in Auswahl für's Volk“, 1900) である。蘆風があげた『現代ドイツ国民詩集』によって四冊目となる計算になる。無論このことだけでは、なおも第一にあげたものと、四冊目とした蘆風が言及しているものとの関係は必ずしも明確ではないが、二つの詞華集の間に、一方が他方の改訂とかいう関係はなさそうに思われる。

### III. アーレントの生涯（概観）

ヴィルヘルム・アーレントに関する研究書、伝記等は皆無といってよく<sup>14)</sup>、その人物像は、大部な文学事典や文学史などから寄せ集めてわずかに知ることができるのみである。そうしたものによると、アーレント (Wilhelm Arent) は1864年7月3日、ヴィトゲンシュタイン侯国の森林監督官カール・アーレント (Karl Arent) の子としてベルリンで生まれる。学校教育はシュールプフォルタで受け、のちダルムシュタットで俳優としての勉強をしている。1882年に最初の詩集『懊悩詩集』 („Lieder des Leids“) を出しているが、実に18才の若さである。しかもひき続いて次々に詩集を出すことになるが、ここで少しく時代状況を記す必要があろう。

ヨーロッパ的視点から眺めると、1850年頃からの写実主義時代が、次第に社会情勢の変革ならびに科学的実証精神に影響をうけて、写実主義 (Realismus) をいわば一步先に進めた自然主義 (Naturalismus) の流れに変わり始めたのは、ゾラ (Emile Zola) の『テレーズ・ラカン』 („Thérèse Raquin“) が発表された1867年頃であるが、一般にヨーロッパ自然主義文学を時代史上に採るとき、1870年頃から1900年——それは、ゾラのルーゴン・マッカール叢書 („Les Rougon-Macquart“) 20巻 (1871~1893) の時代にほぼ相応する——を自然主義時代とする。しかしドイツにおいては多少時代的ずれを考えなければならない。その理由としては、ドイツにおいては、1871年に初めて近代的な国家としての統一がなされ、自然主義運動が起こる基磐となる人間の様々な生活形体を露呈すべき大都市の成立が、ヨーロッパの他の国々に遅れたことがあげられる。すなわち、ドイツにおける自然主義はその第一段階、つまり初期自然主義の時期とみなされている1880~1886年にまずベルリン、及びミュンヘンの二つの大都市を中心に起こったのである。ベルリン生まれのアーレントが第一詩集『懊悩詩集』を出したのは、まさしく初期自然主義の勃興時であった。1883年に『詩初穂』 („Poetische Zrstlinge“), 1884年にも詩集を一冊だし、さらに『ラインホルト・レンツ・その遺稿の抒情的なもの』 („Reinhold Lenz, Lyrisches aus seinem Nachlass“) という、シュトルム・ウント・ドラング (Sturm und Drang) 時代の特異な詩人レンツ (Reinhold Lenz) の遺稿詩なるものを世に出している。

1885年にはベルリンのシュテルン音楽学院で、歌劇音楽の勉強をしているが、それは歌劇場歌手 (Opernsänger) といっても、むしろ俳優としての素養としてのものであったようである。この1885年という年は、すでに『現代詩人氣質』が出版され、アーレントの名は一躍ドイツ文壇に知れ渡った年であるから、アーレントという人は、ひたすら詩人としてのみ生きたのではなく、俳優としての活動をしつつ文学の革命を忘れた極めて特異な、抒情可憐なる「わすれなぐさ」詩から想像し難い詩人であった。その後もダルムシュタット、ベルリン等で、ツェザーリ (Cesari) と名のって舞台上に立ったが、生涯においていくつかの別名を用いた。曰く、コザカント (Kosakante), ハンス・デルロー (Hans Derlou) などである。アーレントの姓自体も、実は事典によって Arent と Arendt の二様の表記が見られるが<sup>15)</sup>、これは、アーレント自身が後年は Arendt に綴りを変えたようで、本名はあくまで Arent のようである。

1885年にはさらに『心の奥底』 („Aus tiefster Seele“) という詩集が出ているが、翌年の1886年から1893年にかけて、アーレントは実に26巻にも及ぶ抒情詩を出したともいわれている。<sup>16)</sup>、『大都会の濛気』 („Aus dem Großstadtbrodem“, 1891), 『三人の女』 („Drei Weiber“, 1891), 『夜のすみれ』 („Viole der Nacht“, 1892), 『鬼火』 („Irrflammen“, 1893) などがあげられるが、このように抒情詩一辺倒ということも、いわゆる初期自然主義派に入るアーレントを、ハルト兄弟 (Brüder Hart), コンラート (Michael Georg Conrad), プライプトロイ (Karl Bleibtreu), コンラーディ (Hermann Conradi) らとも違った存在にした。というのも、自然主義文学は散文、戯曲において効果的に表われたのに対して、詩のジャンル、とりわけ抒情詩においては、その性質

上、必ずしも有効的な面を見せることはできなかったからである。

ミュンヘンでキフホイザー新聞 („Kyffhäuserzeitung“) を手がけて、1890～1894年にかけてアーレントは再びベルリンで舞台に立ち、1895年に雑誌ミューズ („Die Muse“) を発行し、その同じ年、コンラートによって1885年に創刊された初期自然主義の代表的な雑誌ゲゼルシャフト („Gesellschaft“) の共同編集者となった。これには、ヤコボヴスキーも1898年にやはり共同編集者として加わっているが、その前年の1897年、アーレントは神経衰弱が昂じて、『新たなる軌道』 („Auf neuen Bahnen“, 1897) を後に残して、人々の前から姿を消し、没年等は杳として分らないままとなった。

#### IV. 詞華集『現代詩人氣質』

『現代詩人氣質』は、アーレントと、コンラーディ及びカール・ヘンケル (Karl Henckell) の三人の編になる詞華集であるが、通例、この詞華集をあげるときに付けられる編者は、アーレントであり、アーレントの『現代詩人氣質』と称されるほどに、アーレントと一体のもののみなされている。上記三人を含め、当時の若い詩人23人の詩を集めたもので、1885年に出版された。しかし往後、1884年ともされているのは、その年の12月の末に出ていた<sup>17)</sup> という事情と、コンラーディ及びヘンケルの序文、「われらが信条」 („Unser Credo“) と「新らしき抒情詩」 („Die neue Lyrik“) の日付けが1884年となっていることによるものであろう。

この『現代詩人氣質』が当時のドイツ文壇に与えた衝撃は大きいものであった。遠くはヘルダー (Johann Gottfried Herder) によって計画された「民謡集」及至は『少年の魔法の角笛』 („Des Knaben Wunderhorn“), さらに後の表現主義時代の『人類の黄昏』 („Menschheits dämmerung“) にも比すべきものとの見方もある<sup>18)</sup>。当時の文壇に強い影響力を持っていたハルト兄弟の文学論に基づいているヘンケル序文「新らしき抒情詩」は、„新たに統一された、偉大な祖国の若き世代は、詩歌を再び神聖なものにせんと努めるものである……この書物が結びつけている一団の詩人達に、文学の行く手、未来の詩歌はかかっている。“ と熱っぽく語っている。アーレント、ヘンケルより二才年長で、28才の若さで自らの命を断った、三人の中では最も詩才に富んでいたコンラーディも、その序「われらが信条」において、新しい抒情詩の時代の到来を告げ、„偉大な魂と奥深い感情の時代“ の確立を謳い、„来たるべき世紀に呼びかける“ をモットーとして掲げた。

これら編集者達自身の、自分達の行為への熱い思いだけでなく、ハルト兄弟やキルヒバハ (Wolfgang Kirchbach) といった編集者達より年長の者や、ホルツ (Arno Holz) やハルトレーベン (Otto Erich Hartleben) から同世代の詩人、文芸史家らによって、この詞華集への賛辞の論評が続々と寄せられた。例えば、パウル・フリッチェ (Paul Fritsche) は、「現代抒情詩革命」 („die moderne Lyrikrevolution“) と呼び、アンゼルム・ザルツァー (Anselm Salzer) はその浩瀚な著書「ドイツ文学」の中で、„「最新ドイツ青年派」“ („das jüngste Deutschland“) の誕生日を指定しようとするならば、『現代詩人氣質』が現われた1884年のクリスマスを選ばねばならない<sup>19)</sup>。„この詞華集は「現代主義派」 („Moderne“) の最初の共同資料である<sup>20)</sup>。" と述べているが、とりわけ、そもそも『現代詩人氣質』の一団の理論家とも目されるホルツは、

つまらぬ偶像に目をくらまされて  
後しるふり返る預言者たるな  
詩人は現代的であれ

頭のとっぺんからつま先に至るまで！

なる四行詩を献げた<sup>21)</sup>。

ところで、『現代詩人氣質』を論評する際、上記で記したように、「現代主義派」あるいは「最新青年ドイツ派」なる用語、また「現代の」(,modern‘)という形容が使われるのが常である。ホルツの四行詩においても、,modern‘ であれとくに強調されている。この,modern‘ という語は、初期自然主義派にとっては、特別の意味あいをもっていて、若い詩人達の合い言葉ともなっていたものである。,,必ずしもかんばしくはないが、欠くべからざるものとなった<sup>22)</sup> ,modern‘, あるいは, moderne‘ の言葉は、新しい文学観における時代精神を感じさせる語となった。従って、『現代詩人氣質』(,Moderne Dichtercharaktere“)にも用いられた, modern‘ にもそういう特別の意味が付与されているのである。

ハルト兄弟の内の弟のユリウス・ハルト (Julius Hart) は80年代の文学の姿勢を四つの標語によって特徴づけた<sup>23)</sup>。1) 文芸は現代的 (,modern‘) たること。頭のとっぺんから足のつま先に至るまで<sup>24)</sup>。2) 民族的 (,national‘), ゲルマン的, ドイツ固有なものであること。3) 写実的 (,realistih‘) であること。4) 個性的 (,individual‘) であること。第一の標語についてはすでに触れたが、第二の, 民族的‘, あるいは, ドイツ的であれという言葉は、ドイツの自然主義がゾラやイプセン (Henrik Ibsen) らの影響をうけて起こった事を考えると一見不可思議であるが、実は、初期自然主義派、特にハルト兄弟、コンラート及びコンラーディらは愛国的側面を少なからずみせ、『批評闘争』(,Kritische Waffengänge“)という雑誌<sup>25)</sup>に拠ったハルト兄弟は、ゾラに対する批判を行っているほどである。第三の, 写実的‘ の語は、やがて、自然主義的 (,naturalist‘) の言葉に置き換えられたが、, 徹底した写実主義‘ (,konsequenter Realismus‘) という言葉も用いられたのは、文学史の流れとしてはしごく当然であろう。しかしここで、写実主義との関連から、ハンシュタイン (Adalbert von Hanstein) が命名した「最新青年ドイツ派」(「das jüngste Deutschland」)なる語は、「青年ドイツ派」(「das junge Deutschland」)からの類推によるものであることに触れる必要がある。というのは、ヘンケルは序文の中で、『現代詩人氣質』を一種の雑誌のように、継続的なものにする意図のあることを表明し、その計画は結局実現しなかったが、1886年の『現代詩人氣質』の第二版は、「青年ドイツ」(「Jugenddeutschland」)と、内容は改められることなく、名付けられたからである。第四の, 個性的‘ については、ことさら言を費すこともないと思われるが、アーレントほどまさしく個性的な存在も、初期自然派には見あたらないであろう。

## V. 『現代詩人氣質』の編者アーレント

詞華集『現代詩人氣質』は、,,因襲的な芸術、慣習的型式、腐敗した節操のない工場の仕事へ激しく立ち向った<sup>26)</sup>“ 革命的な書で、初期自然主義派の詩人で触発を受けた人は多く、いくつかの本や雑誌がこの影響の元に出版された<sup>27)</sup>。しかしこの詞華集は、前述したように、継続を意図されながらも第二版のみで終らざるを得なかったのは、時とともにその評価は衰え、のちにはこの詞華集に直接係わった者の中でその才が認められたのは、28才で夭折したコンラーディが挙げられるのみで、しまいには、中心的役割を果たしたほかならぬアーレントその人のディレッタント性が強調される<sup>28)</sup>ほどとなった。ヘルダーの仕事やブレンターノ (Clemens Brentano) らの作業にも比すべきものとなる筈のものが、質の高さに欠けたことと、目標設定の曖昧さによってそれらと同じような役割を果たすに至らなかったのは、ホルツを除くと、重要な自然主義抒情詩人を送り出せなかったという、『現代詩人氣質』という一つの運動の決定的弱さがあったからである。

しかし事ここに至らざる得ない必然性のようなものが、初期自然主義派の詩人達の中に内抱していたこともまた事実である。というのは、初期自然主義派には、実に多様な顔があったと言える。つまり、自然主義者、写実主義者、最新青年ドイツ派、疾風怒濤派、さらには、当時詩人として重きをなしていたリーリエンクローン (Detlev von Liliencron) の強く排するところとなっていた、ロマン主義者などである。疾風怒濤派などと、ずいぶん古めかしいものが登場して、まことに奇妙な感じがするが、そのことは、アーレントを含め初期自然主義派の混沌とした状況が、それだけ一層複雑怪奇であった事の証明でもある。最新青年ドイツ派とも呼ばれた初期自然主義派の一群は、青年ドイツ派よりも遙かに古い、18世紀のシュトルム・ウント・ドラングの詩人を自分達の行動の意味づけに引きずり出して来たのである。なかでも、18世紀の末葉には半ば忘れられて、埋もれていたレンツがブライプトロイによって、クライスト (Heinrich von Kleist) やヘッベル (Friedrich Hebbel) 以上に持ち上げられたが、そのレンツを異常なまでに称揚したのが、ほかならぬアーレントであった。アーレントは、このゲーテ時代の最も激越な詩人レンツを、『ラインホルト・レンツ、その遺稿の抒情的なもの』という、事實はアーレント自身の手になる詩集を世に出した。シュトルム・ウント・ドラングの自然主義的特徴の遺産として「青年ドイツ派」が現われたとすれば、それと比せられ、またその名から作りだされた「最新青年ドイツ派」は、自然主義的傾向を多く共有するところ、否本元に近づいたとも言えるのかもしれない。またハルト兄弟のように、さらに、啓蒙主義のレッシング (Gotthold Ephraim Lessing) にまで遡って自分達の立場を示そうとした動きも、啓蒙主義、自然主義が共に、人々に自然の理、実相を告げ知らせようとするものだと認めれば、同じくあながち突飛として、退けることもできないであろう。

しかしここでアーレントに立ち戻ってみると、「シュトルム・ウント・ドラング」及び「青年ドイツ派」と「疾風怒濤派」の名も有していた「最新青年ドイツ派」とを簡単に同一視することになると、それはまた間違っていると言えよう<sup>29)</sup>。たしかに前二者と後者は、伝統的なものに反抗し、甘ったるい芸術性の代りに理の自然と真実とを追求したし、共に外国からの影響、すなわち前二者の一方はルソー (Jean Jacques Rousseau)、他方はシェークスピア (William Shakespeare)、そして後者はゾラ、イプセンの影響をうけたことは否定できない。しかし自然主義の流れそのものは前二者と大きく異なって、一つドイツのみに係わるものではなく、汎ヨーロッパ、汎世界的であった。そのような大きな流れの中で、自然主義的要素があるとの一面からのみ過去を遙か遡って、無理やりに先達に結びつけようとした初期自然主義派の一群は、自らを徒らに混迷へと陥し込んでしまった。アーレントの詩も、『大都会の濛気』、『夜のすみれ』、『鬼火』と時代が下がると、„デカダンの気分を漂わせる“<sup>30)</sup>のみで、『三人の女』は、„デカダンの道程の行きつくところ“<sup>31)</sup>となった。

初期自然主義派の詩人群の中でも、ひととき異彩を放ったアーレントは、自己の発露の果てに、狂気と化してモスクワの路上に斃れたレンツの姿を借りたが、やがて十年余ののち、あるいは精神の病に陥ったか、人々の前から忽然として消え去ってしまった。自然主義という流れに束の間愛でられたが、やがて忘れ去られたアーレントは、「わすれなぐさ」に読みこまれた „ひとつと“ の花であった。

## 注

- 1) ハイネが1854年冬パリで書き記しもの。ハイネはこれを、“この上なく重要な生の証文”と見なしていた。
- 2) ゲーテが、“中国人すらはらはらする手つきでロッセとヴェルターを……”(Vgl. „Venezianische Epigramme“)と詠んでいることに、一種の対抗意識から、中国より遙かに遠い日本を引き合いに出して、名声を誇った感がする。(Vgl. Heines Werke, Bibliographisches Institut, Leipzig, 6. Bd. S. 71 f.) なおハイネに関しては、鈴木和子氏の「ハイネ」——『歌米作家と日本近代文学』ドイツ篇』所載、教

- 育出版センター，昭. 50. —の項に多々教えられた。
- 3) 例えば Fritz Martini の „Deutsche Literaturgeschichte von den Anfängen bis zur Gegenwart“ にもこれらの詩人の名は見当らない。
  - 4) 安田保雄：「上田敏研究—その生涯と業績—」（矢島書房），昭和33年。
  - 5) Vgl. 関良一（校訂）：「近代文学注釈大系，近代詩，」（有精堂），昭和38年，114頁。
  - 6) Vgl. 高橋健二：「ヘルマン・ヘッセ—危機の詩—」（新潮社），昭和49年，84頁。
  - 7) 島田謙二：海潮音の「わすれなぐさ」その他，『多磨』第二巻第六号（昭和11年）所載，108～109頁。
  - 8) 安田保雄：前掲書，57頁。
  - 9) 島田謙二：前掲論文，110～111頁。
  - 10) 「於母影」の中の鷗外訳以外の詩も，ドイツ語を解する人の少なかった新声社同人のため，鷗外がおおよそその意を伝えて，各自に訳させたとも言われており，訳詩の日本詩にも鷗外の影響は考えられうる。
  - 11) Vgl. Nene Deutsche Biographie, Duncker u. Humblot, Berlin, 10. Bd. S. 241.
  - 12) 実際は，ただ ‚für’s Valk‘ となっている。
  - 13) ヤコボグスキー（1868—1900）は，「反セム主義防衛同盟」のための活発な活動もしたユダヤ系作家。ユダヤ主義とドイツ文化とのほざまでの苦しみながらの活動が近年，ユダヤ精神史の視点から評価され始めた。カール・ブッセの友人でもあった。
  - 14) Vgl. Roy C. Cowen: Der Naturalismus. Kommentar zu einer Epoche, Winkler, 1973. S. 262.
  - 15) 例えば，„Deutsches Theater Lexikon“, (hrsg. v. W. Kosch, Verl. Fred, (953) は ‚Arendt の綴りを，„Deutsches Literatur-Lexikon“, (Francke, 1968) は ‚Arent‘ を採用している。
  - 16) Vgl. Literarische Manifeste der Jahrhundertwende, 1890—1910, hrsg. von E. Ruprech u. D. Bänsch, J. B. Metzler, Stuttgart, 1970. S. 306.
  - 17) Vgl. Anselm Salzer: Illustrierte Geschichte der deutschen Literatur, München, 1912. Bd. 3, S. 2141.
  - 18) Roy C. Cowen: a. a. O. S. 71.
  - 19) Anselm Salzer: a. a. O. S. 2141.
  - 20) ders.: a. a. O. S. 2142.
  - 21) Arno Holz: Werke, Luchferhand, Bd. 5, 1962, S. 122.
  - 22) Georg Witkowski: Die Entwicklung der deutschen Literatur seit 1830, Leipzig, 1912. S. 88.
  - 23) Julius Hart: Die Entwicklung der neueren Lyrik in Deutschland, in: „Pan“, Jg. 4, 1896, H. 1, S. 33.
  - 24) 前記ホルツの詩の一部。
  - 25) 厳密には雑誌というよりパンフレット。1882—1884にかけ不定期で発刊された。
  - 26) Waldmar Oehlke: Die deutsche Literatur seit Goethes Tode, Max Niemeyer, 1921, S. 582.
  - 27) 例えば1885年 „Die Gesellschaft“ 創刊。1886年ブライプトロイの「文学の革命」 („Revolution der Literatur“, ホルツの「時の書」 („Buch der Zeit.“) 出版など。
  - 28) Alfred Wiese: Deutsche Literaturgeschichte, C. H. Beck. München, 3. Bd, 1910, S. 529.
  - 29) Anselm Salzer: a. a. O. S. 2150.
  - 30) Adolf Bartels: Deutsche Literaturgeschichte, Hessel, Leipzig, Bd. 3, 1928, S. 426.
  - 31) Ottokar Stauf von der March: Décadence. Randglossen, in: „Die gesellschaft“, Jg. 10, 1894, H. 4, S. 528.

なお，注で挙げた文献以外にも，本論文を書く際に参考となったものを下記に記す。

島田謙二：『日本における外国文学』，上下，（朝日新聞社），昭和50年。

小堀桂一郎：『若き日の森鷗外』，（東京大学出版会），1969。

同：『西学東漸の門森鷗外研究』（朝日出版社）昭和51年。

富士川英郎：『西東詩話』（玉川大学出版部）昭和49年。

鈴木重貞：『ドイツ語の伝来—日本独逸学史研究』（教育出版センター）昭和50年。

福田光治・剣持武彦・小玉晃一編：『欧米作家と日本近代文学ドイツ篇』（教育出版センター）昭和50年。

（昭和56年9月30日受理）

（昭和57年3月15日発行）